

学校レジリエンス支援「みらいぶらりい」事業（レバノン）中間報告

国際医療救援部 国際救援課 李壽陽

（派遣期間：2018年3月～2019年3月）

（報告日：2018年12月16日）

レバノン国内では現在、日本赤十字社と現地赤十字社による3つの事業が実施されています。そのうちの1つが、「みらいぶらりい」の愛称で親しまれている学校支援事業です。本事業は、レバノン赤十字社とともに、2018年1月より、3年の事業期間の予定で開始されました。

「日赤の国際活動」というと、保健衛生や医療支援事業、災害直後の緊急救援活動を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。そんな日赤がレバノンの学校を支援するに至ったきっかけは、当院国際医療救援部が、世界的な奉仕団体である国際ソロプチミストアメリカの日本中央リジョン様より、30周年記念事業の一環としてご寄付をいただいたことでした。いただいたご寄付の使途について大阪赤十字病院国際医療救援部と日本赤十字社本社（以下、日赤）で協議した結果、赤十字運動の理念・枠組みに則り、情勢の混迷する中東地域で支援活動を展開することとしました。そして、ご寄付の主旨から、特に子どもたちを支援する運びとなりました。

事業の形成過程で日赤とレバノン赤十字は、シリア難民とレバノンの子どもたちの両方が恩恵を受け、紛争の影響を受けた子どもたちが安心して学べる、やさしい空間の提供を目的とすることを話し合いました。

本事業の愛称「みらいぶらりい」には、「みらい（未来）」を託された子どもたちが学べる空間「らりい（Library: 図書館）」の意が込められています。

3年間で支援する学校は9校。各支援校は、子どもたちがより安心して楽しく学び過ごせる空間を提供するため、校内設備の改修にかかる計画書をレバノン赤十字へ提出します。その計画書をもとに、各校のニーズに見合った改修を赤十字がサポートします。

過去の内戦により多数の銃痕が残る学校や、紛争を逃れた難民の子どもたちが多く在籍する学校など、支援校に選ばれた学校の実情は様々です。

事業初年度の今年にはレバノン北部のトリポリにある学校と、南部のスールにある2校の計3校を対象とし、子どもたちの学びに必要と考えられる図書室や講堂の改修、本棚の設置などを支援しました。

11月に今年度の支援校の改修がすべて完了しましたので、その一部をご紹介します。



レバノン国内の「みらいぶらりい」事業地

UNHCR, Lebanon Information Hub, Map Hub

<http://data.unhcr.org/lebanon/>

(1) アル・コッペー・スクール (レバノン・トリポリ)



改修前の講堂舞台



改修後の講堂舞台をレバノン赤十字職員、学校関係者とともに確認した

(2) アル・マサカン・スクール (レバノン・スール)



改修前

全校生徒数 1,049 名のところ、40 名以上の生徒が集まれる空間が校内になかった



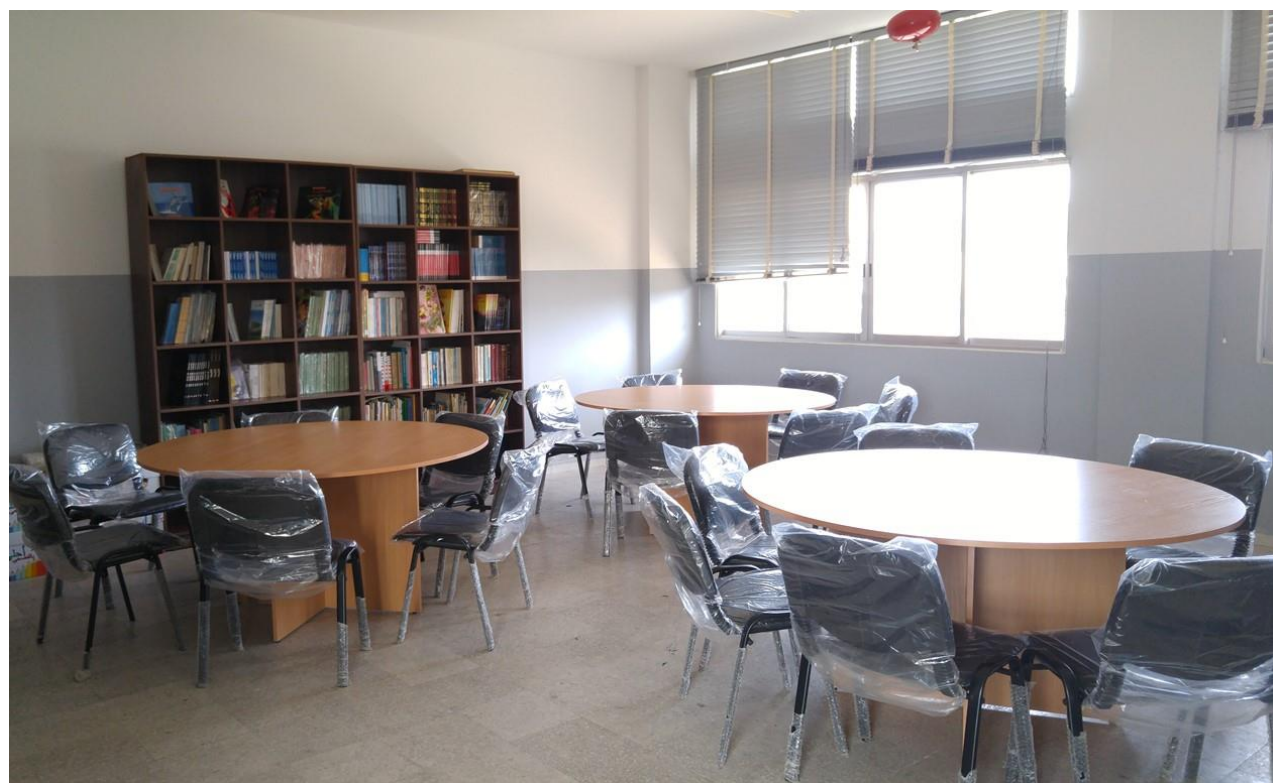
改修後

様々な行事を開催し、生徒と保護者、地域の交流の場として活用されている

(3) アル・シャハビー・スクール (レバノン・スール)



改修前の図書室



改修前の図書室

お絵かきといったグループワークや、グループでの話し合いに適した丸テーブルを搬入した

改修を終えて2週間後の11月末に南部（スール）の支援校を訪れた際には、改修した校内設備の活用例について嬉しそうに話す校長先生の笑顔がとても印象的でした。校長先生のお話から、シリア難民とレバノンの子どもたちがもっとたくさん自己表現をできるようにと配慮されていること、学校が保護者と地域社会を繋ぐ場となれるように日々努めておられることなどを聞くことができました。

次回の訪問時に、子どもたちから赤十字の支援に対する率直な感想を直接聞くことができれば、本事業に関わった者として嬉しく思いますし、そのお話を日本の皆さまへ共有することができれば幸いです。

2011年の「シリア危機」以降、隣国で厳しい暮らしを続けるシリア難民と、限られた資源のなかで難民を受け入れるホストコミュニティの双方にとって有益な支援を提供できるよう、これからも現地の声を大切にしていきたいと思えます。

今後とも、大阪赤十字病院と日本赤十字社の国際活動にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

※国際医療救援部公式フェイスブックもご覧ください。



赤十字事業に欠かせない現地赤十字社のスタッフとボランティア



アル・マサカン・スクールのアトラッシュ学校長